洋１４－１１３

「ニンフォマニアック　Ｖｏｌ．１／Ｖｏｌ．２」　❀❀❀❀

２０１４（平成２６）年９月９日鑑賞＜松竹試写室＞

監督・脚本：ラース・フォン・トリアー
ジョー（過激なセックスをくり返す女性）／シャルロット・ゲンズブール
セリグマン（ジョーを救出し、ジョーの話を聞くインテリ紳士）／ステラン・スカルスガルド
若いジョー／ステイシー・マーティン
ジェローム・モリス（印刷会社の社長代理、ジョーの恋人）／シャイア・ラブーフ
ジョーの父親（医師）／クリスチャン・スレイター
Ｋ（セックス・セラピーを行っているサディスト）／ジェイミー・ベル
Ｈ夫人（Ｈ氏の妻）／ユマ・サーマン
Ｌ（怪しげな借金取り立て業の男）／ウィレム・デフォー
Ｐ（悲惨な家庭環境で育った少女、ジョーが後継者に育てる少女）／ミア・ゴス
Ｂ（若いジョーの幼なじみの女の子）／ソフィ・ケネディ・クラーク
キャサリン（ジョーの母親）／コニー・ニールセン
年老いたジェローム／マイケル・パス
債務紳士（ある後ろめたい性癖をもった債務者）／ジャン＝マルク・バール
ウェイター／ウド・キア
２０１３年・デンマーク、ドイツ、フランス、ベルギー、イギリス映画・２４０分（Ｖｏｌ．１：１１７分、Ｖｏｌ．２：１２３分）
配給／ブロードメディア・スタジオ

＜ラース・フォン・トリアー監督の作品は必見！そう意気込んだが・・・＞

『ダンサー・イン・ザ・ダーク』（００年）は泣ける映画で私の大好きな映画だったが、その監督の名前がデンマーク生まれのラース・フォン・トリアーと知ったのは、同監督作品で、私の大好きなニコール・キッドマンが主演した異色作『ドッグヴィル』（０３年）を見たとき（『シネマルーム４』１３５頁参照）。そして、ラース・フォン・トリアー監督の０９年のカンヌを騒然とさせた『アンチクライスト』（０９年）を見た時は、「これって、ひょっとしてラース・フォン・トリアー監督の妄想？」と驚かされたものだ（『シネマルーム２６』８３頁参照）。さらに、その後の同監督作『メランコリア』（１２年）は『アンチクライスト』よりはずっとまともだった（？）が、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』にのせて、地球に迫ってくる巨大惑星「メランコリア」を描く映画の世界観（終末観）は、かなり不気味だった。

そんな流れの中で私の頭の中にははっきりラース・フォン・トリアー監督の名前が刻みこまれたが、そのラース・フォン・トリアー監督が今度は「色情狂の女」を主人公にした合計４時間の映画を完成させたと聞いてびっくり。チラシには、「鬼才ラース・フォン・トリアーが女性の“セクシュアリティ”に挑む映画史上もっともセンセーショナルな問題作Ｖｏｌ．１、Ｖｏｌ．２連続上映！」、「自らを色情狂と認める女性ジョー　８つの章で綴られる、詩的で滑稽な『性』の旅路」と書かれている。かつて、『エマニエル夫人』（７４年）が大ヒットした時にも、似たような扇情的なうたい文句が氾濫したが、その時は女性をターゲットにしたことを意識してか、写真等はそれなりに美しいものだった。しかし、時代が変わり、監督がかわると・・・。

本作の主人公（ヒロイン）ジョーを演じるのは、『アンチクライスト』でびっくりするような役を堂々と演じた英国人女優シャルロット・ゲンズブール。しかし、同時に本作には『キル・ビル』（０３年）（『シネマルーム３』１３１頁参照）、『キル・ビル　Ｖｏｌ．２』（０４年）（『シネマルーム４』１６４頁参照）でものすごいアクションを演じたハリウッド女優ユマ・サーマンや、『トランスフォーマー』（０７年）、『ディスタービア』（０７年）（『シネマルーム１６』４３６頁参照）で彗星のように登場した若手俳優シャイア・ラブーフも出演している。なるほど、こりゃ必見！そう意気込んで試写室へ出かけたが・・・。

＜「性の旅路」を語るには、聞き手が大切！＞

『エマニエル夫人』（７４年）は、当時のフランス映画のおしゃれな雰囲気と、小悪魔的な女優シルビア・クリステルの魅力が相まって大ヒットし、その後『続・エマニエル夫人』（７５年）、『さよならエマニエル夫人』（７７年）等、計７作もつくられた。私が大学時代に読んで、メチャ面白かった小説と映画『トム・ジョーンズの華麗な冒険』（６３年）は、男が語る女遍歴の物語だが、『エマニエル夫人』は女性が語る男遍歴の物語だった。

しかして、本作は自らを「色情狂」と認める女性・ジョーが語る「性の旅路」の物語だが、「第１章　釣魚大全」「第２章　ジェローム」「第３章　Ｈ夫人」「第４章　せん妄」「第５章　リトル・オルガン・スクール」「第６章　東方教会と西方教会（サイレント・ダック）」「第７章　鐵」「第８章　銃」から成る、４時間もの長丁場の物語だ。

そんな、一人の女の「性の旅路」の物語を飽きることなく楽しく聞かせるためには、その「聞き手」が大切になる。「良き聞き手」とは黙って相手の話を聞くだけではなく、たまには質問したり反論したり、あるいは突っこみを入れたり自説を展開したりと、語り手の話しをより面白くするためのさまざまな能力が必要だ。本作で、その重要な（聞き手）の役割を演じるのは本作冒頭に、行き倒れのように倒れ込んでいるジョーを助け、自宅のベッドのに寝かしつけた男・セリグマン（ステラン・スカルスガルド）だ。ジョーは「・・・・・・理解する気があるのなら、何もかも話してあげるわ」と、自らの「性の旅路」を語り始めるが、読書好きで初老の男セリグマンは、その聞き手として、釣り、音楽、数学、文学、芸術、宗教、歴史など幅広い分野にわたって博識ぶりを見せつけてくれるから、それにビックリ！

なるほど、このすばらしい「聞き手」の存在によってジョーの性の旅路の物語により深みが増すことはまちがいない。しかし、そうかと言って、いちいち学者まがいの解釈を聞かされたり、スクリーン上にその解釈を映されるのは、いかがなもの・・・。

＜セックスシーンは、日活ロマンポルノの方がよほど上等！＞

ＡＶビデオを観ても、すべてに露骨なだけがとりえの「洋モノ」より、一定のテーマがあり、情緒に溢れた「日本モノ」の方がよほど上等。まして、出演する女優陣が巨大な胸を持った白人女や黒人女より、やはり日本人的可愛さと日本人的適正サイズをもった日本人女性の方が、観ていて安心するのは当然だ。

本作には、次の３つの時代（性態？）のジョーが登場する。すなわち、①２歳から自分の性器を意識し、友達の女の子と一緒に風呂場で「カエルごっこ」をして遊ぶ子供時代のジョー、②学校の遠足に出かけた１２歳の時、１人で丘に寝そべっていた時に浮遊感を感じ、はじめてオーガズムを体験したという、Ｖｏｌ．１で主役となる若き日のジョー（ステイシー・マーティン）、③そして、突然不感症になってしまって以降、Ｖｏｌ．２から登場し、出産を経た後、サド・マゾを含むさまざまな異常プレイに八マっていくジョーだ。

ジェローム・モリス（シャイア・ラブーフ）とは、偶然の出会いが２度、３度に及ぶので、最初の苦痛だけのセックスから、妊娠するセックス、そして異常セックスとさまざまなバリエーションが展開される。さらに本作では、８章、４時間にわたる物語の中で、①セックス・セラピーを行っているサディスト・Ｋ（ジェイミー・ベル）、②ある後ろめたい性癖を持った債務紳士（ジャン＝マルク・バール）をはじめとする、異常な性体験が語られていくからそれに注目！

しかし、この３つの時代（性態？）にまたがってジョーがスクリーン上で見せてくれるセックスシーンは、「洋モノ」特有の露骨さのみが目につき、情緒感が全くないから、長い間観ていると少しずつウンザリ。こんなセックスシーンなら、日活ロマンポルノの方がよっぽど上等！

＜人生いろいろ！色情症もいろいろ。＞

１９４９年１月に生まれてから、小・中・高・大学、司法修習時代が２５年、そして弁護士生活４０年を経て６５歳になった今、島倉千代子が歌った『人生いろいろ』の意味が私なりにわかってきたような気がする。そんな私だからこそ、本作を観た上で、色情症についてネット情報を調べると、「色情症もいろいろ」ということがわかる。男は誰でも一度くらいは、ひょっとして自分は異常性欲では？変態では？そして色情症では？と考えたことがあるはず（？）だが、それは女でも同じらしい。異常性欲型は、男なら「サチリアジス」、女なら「ニンフォマニア」と呼ばれるそうだが、さてその実態は？

映画はエンタメであると同時に勉強。そんな信念を持つ私としては、本作はエンタメとしてはあまりオススメできないが、勉強のネタとしては豊富なものがある。ジョーとセリグマンとの２人の会話だけで４時間も持つはずはないから、ジョーの「性の旅路」は８つの章に分かれて「実写スタイル」でストーリー性豊かに語られるが、そのセックスシーンの情緒のなさは前述したとおりだ。しかし、あらゆる分野に博識ぶりを示すセリグマンのつっこみや反論、そして問題提起や解説は大いに勉強になる。もっとも、それをいちいちスクリーン上で見せてくれるのは過剰サービスで、これも情緒不足と言わざるをえないが、それでもあなたの知識欲を満たすことはまちがいないはずだ。しかして、ジョーの「性の旅路」は、ジョーが裏稼業ながら自分の後継者として育ててきた、悲惨な家庭環境で育った少女Ｐ（ミア・ゴス）が、コトもあろうにジョーの最愛の男ジェロームとデキてしまったことに絶望したジョーのある行動によって終わりを迎えることになるが、さてその行動とは？

＜エピローグから再びプロローグへ。あっと驚く結末は？＞

第８章のテーマは「銃」。しかし、そのストーリーの大半は、倒錯的な性体験の豊富さを見込まれたジョーが、Ｌ（ウィレム・デフォー）という怪しげな男の下で借金取り立ての闇ビジネスで意外な能力を発揮するというストーリーになっている。ヤクザまがいの借金取り立て屋は、銃を見せて脅かすことによって目的を達しようとするが、『ミナミの帝王』で竹内力が演じる銀ちゃんこと萬田銀次郎を見れば、暴力的取り立てがベストでないことがよくわかる。しかして、ジョーの天才的な借金取立ての才能が発揮されたのは、周りのモノを壊されてもビクともしない、ある性癖を持った男の性癖を見抜き、巧みな話術でその弱点に斬り込んだ時だ。何の暴力も払わず、この男の口から「すぐに全額を支払う！」との言葉を引き出したジョーの人生体験の豊かさは、弁護士４０年の私にも大いに参考になるものだ。

そんなジョーの能力をＬは高く評価したが、それでも後継者が必要だとＬから言われて、ジョーが育てていたのがＰ。Ｐは当初銃に頼ろうとしていたが、いつの頃からかジョーの教えよろしきを得て、大きく成長してきた。しかして、今日の借金取り立てのターゲットは何と３度目の偶然の再開を果たしたジェローム。既にジェロームも初老の男になっていたから、ジョーはこの取り立てをすべてＰに委ね、報告を聞くだけにしていたが、何とそこで２人の間で展開していた事態とは・・・？

その後に発生するジョーによる銃の持ち出し、銃の不発、ジョーの行き倒れというラストに向けたストーリーは、あなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、さらにあっと驚くのは、再びプロローグに戻ってから展開される本作の結末だ。ジョーがすべてを語り終わり、いよいよ疲れた身体で眠りに就こうとすると・・・。

あっと驚く、そこでの出来事は、多少は予測できたことだが、まさかホントにそんな結末になろうとは！これも勉強といえばたしかにそうだが、「性の旅路」を語りつくした結果としての人間の相互理解と信頼を期待した私は、この驚愕のラストシーンを見ると、人間不信の感情をますます濃くしてしまうことに・・・。そうなると、さて本作の製作目的は・・・？

２０１４（平成２６）年９月１６日記